人文地理学研究　XII　87～112　1988

黒部川扇状地における農村のコミュニケーションと公民館

田　林　　明

Ⅰ　はしがき
Ⅱ　入善町木根地区の生活組織とコミュニケーション
　Ⅱ－1　「島」と同族集団
　Ⅱ－2　班の機能と行事
　Ⅱ－3　区（生産組合）の機能と行事
　Ⅱ－4　木根地区の諸組織と行事
　Ⅱ－5　農村のコミュニケーションの特色
Ⅲ　農村のコミュニケーションと公民館
　Ⅲ－1　自治公民館
　Ⅲ－2　地区公民館
　Ⅲ－3　中央公民館
Ⅳ　むすび

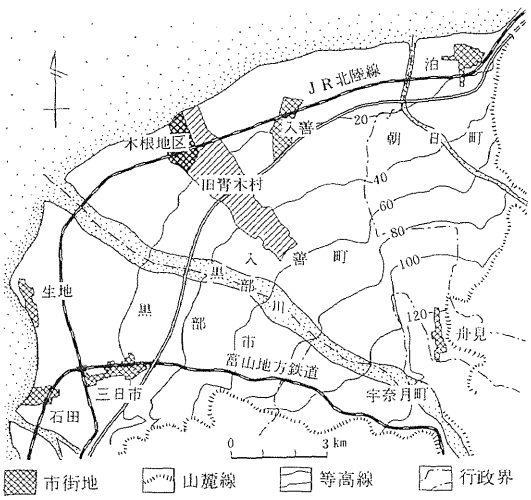
Ⅰ　は　し　が　き

1960年代からの経済の高度成長期に進められた農業の基盤整備と機械化・合理化によって，生産性の向上と省力化が多くの地域で達成された．数は少ないが，全国各地で，それぞれの場所の条件に応じた自立農業経営が実現された[1]．他方では，大多数の農家は恒常的通勤兼業などの安定した農外就業を取り入れ，その分だけ農業活動を縮小する方向にむかっている[2]．方向は異なるが，いずれの場合においても農家の所得水準は著しく向上したことは事実であり，1985年の農林水産省の農家経済調査によると，1農家当り6,956,000円の収入をあげるに至った．これは非農家を含めた全世帯の平均収入の5,338,000円の1.3倍になる．その結果，農村においてもこれまでの経済活動重視の傾向から，文化活動やレクリエーション活動を含めた日常生活の質の向上，生活環境の整備などに一層目がむけられるようになってきた．余暇時間の増大，人口の高齢化にともなう未就業者の増加もこの傾向に拍車をかけている．

黒部川扇状地における自治体もかつての経済政策重視の方向から大きく転換している．黒部市は1983年3月に発表した総合振興計画において「いきいきと健康で豊かなゆとりのある黒部市をめざして」とうたい[3]，入善町も1983年3月の新総合計画において「活力とうるおいに満ちた文化のまち入善」という方針をかかげた[4]．いずれも，地域文化やスポーツの振興，社会教育活動の活性化を通じて，住民の生活・文化の向上をはかることを主要な目標としている．

ところで，コミュニケーションとは「社会生活を営む人間の間に行われる思想交換あるいは思想伝達」のことを指すが，地域の文化や生活の向上を実現するには，施設面の充実をはかるとともに，コミュニケーションの円滑化をはかることが重要である．そのために現代の農村のコミュニケーション活動の実態を分析し，その特徴を探ることが必要であろう．この報告では農村の住民のコミュニケーションに大きな役割を果たしていると考えられる日常のつきあいや諸行事，さらにそのための組織と施設について，特にそれらの空間的広がりや配置に着目しながら検討することにする．

研究対象地域として，すでに調査の概要を発表した入善町木根地区を取りあげ[5]，まず集落の段階



第1図　研究対象地域

での諸行事や生活組織の実態を検討し，さらに入善町や黒部川扇状地全域に視野を広げていくことにする．木根地区は黒部川扇状地扇端部に位置する集落で（第1図），1986年12月の入善町住民課の資料によると，戸数95，人口433を数えた．農業センサスでは木根地区を西島と三島の2つの農業集落に分けているが，大字としては1つのまとまりである[6]．1985年の統計によると，農家は76戸，専業農家と第1種兼業農家はそれぞれ3戸と5戸で，残りの68戸が第2種兼業農家であった．そして兼業農家の80%以上が恒常的勤務に従事していた（第1表）．住民の就業状況を黒部川扇状地地域社会研究所の1986年12月の調査結果でみると，農業従事者は82人で，全就業者255人の32.2%を占めるにすぎず，製造業と建設業を合せた第2次産業従事者が108人で全体の42.4%，第3次産業従事者は25.4%を占めた（第2表）．まさに，「景観的には農業的要素が卓越するが，機能的には非農業的・都市的要素を極めて多く含む農村」といえよう[7]．

木根地区の住民のコミュニケーションは，さまざまな機会を通じて行なわれるが，班や区などの自治組織，本家と分家関係などの同族組織，主に農業に関する生産組織，宗教組織，年齢別・性別につくられているさまざまの組織，その他余暇組織などが重要な役割を果たしていると考えられる[8]．まず，これらから検討することにしよう．

第1表　入善町木根地区における専兼業別農家数（1985年，単位：戸）

農業集落	総戸数	農　家	専業農家	第1種兼業農家	第2種兼業農家	兼業の種類			
						合　計	恒常的勤務	日雇・臨時雇	自　営
西　島	26	24	1	1	22	23	18	—	5
三　島	67	52	2	4	46	50	43	5	2
合計(木根)	93	76	3	5	68	73	61	5	7

資料：1985年農林業センサス

第2表　入善町木根地区の就業状況（1986年12月）　（人）

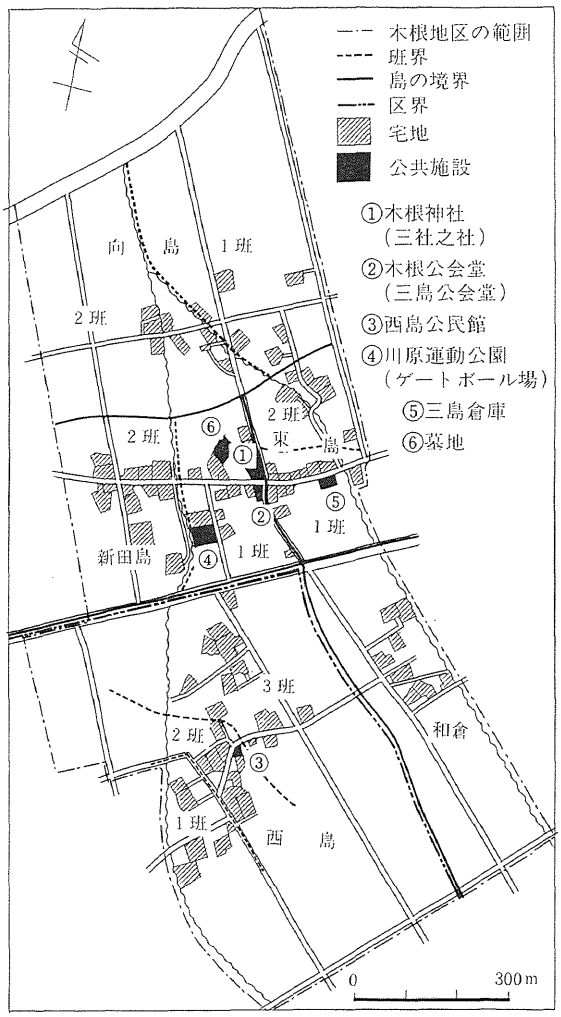
	農　業	製造業	建設業	卸小売	運輸・通信	団体職員	公務員	サービス業	その他	就業者合計	非就業者	合　計
西　島	24	15	19	5	2	3	4	2	2	76	40	116
三　島	58	52	22	12	10	4	11	7	3	179	141	320
合　計	82	67	41	17	12	7	15	9	5	255	181	436

資料：黒部川扇状地地域社会研究所研究員の聞き取りによる

Ⅱ　入善町木根地区の生活組織とコミュニケーション

Ⅱ－1　「島」と同族集団

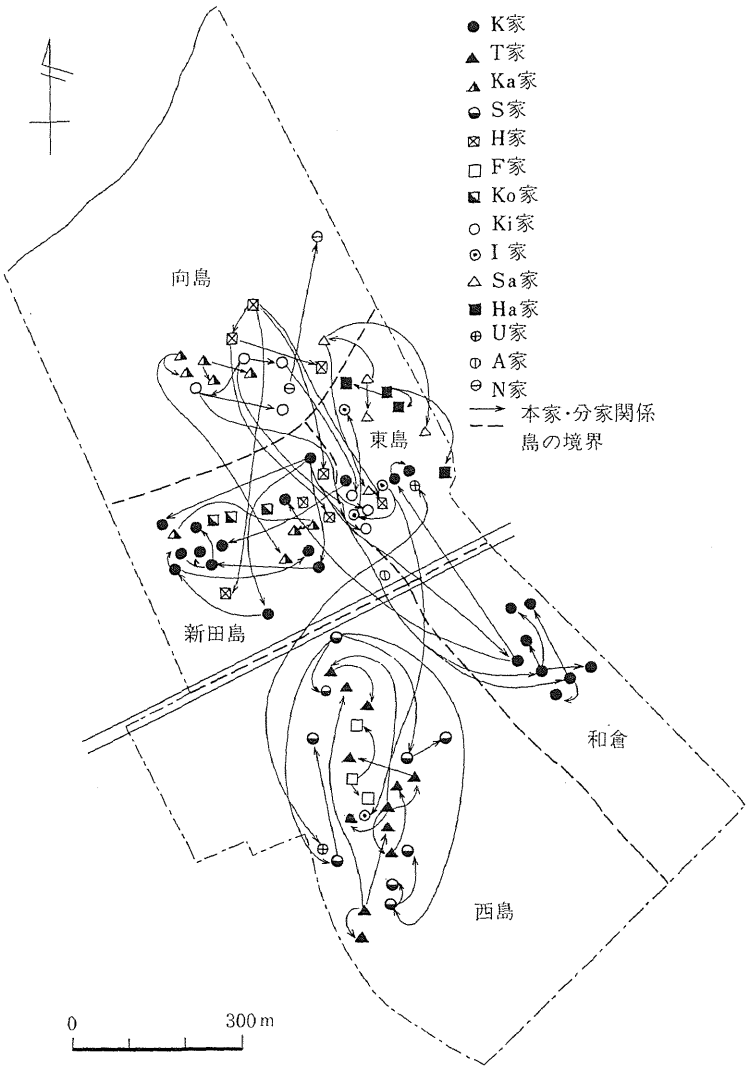
木根地区の家屋の分布をみると，おおまかに主要地方道魚津・生地・入善線ぞいの中央部の塊り，北部，南東部，南西部の全体で4つのまとまりに分かれていることにきずく．第2図に示したように，北部は向島，南東部は和倉，南西部は西島，中央部の東が東島，そして西が新田島と呼ばれている．向島，和倉，西島，東島，新田島のそれぞれの戸数は，15，8，26，20，24である．和倉は本来東島の一部であり，明治期以降の比較的新しい分家が増加して成立したものである．和倉を含む東島と向島，新田島の総称が三島である．この三島の範囲が現在の行政の末端組織である区をつくっており，同時に農業協同組合の下部組織である生産組合でもある．西島は別の区と生産組合をつくっている．



第2図　入善町木根地区の班と島と区
資料：現地での観察と聞き取りにより作成

このような「島」と呼ばれるものは，すでに富山県砺波平野や石川県手取川扇状地を初めとする多くの扇状地性平野における村落研究において指摘されている．橋本は砺波市鷹栖地区の研究において[9]，「彼等は用水路に区分された島状微高地に居住し，その周辺を漸次開拓していった．開拓が進み，かかる生活空間が連鎖的に形成されてくると，それらの複合的な生活空間として，後世のシマの原型にあたる小シマ複合空間が醸成されてくる．」と述べている．木根地区の場合にも，点在していた土壌の多少深い微高地が個々に開拓されてゆき，さらに開拓地がしだいに連合して「島」を形成していったと考えられる．黒部川扇状地の開拓は江戸前期から活発に進められたが[10]，小規模なものは明治期以降，昭和10年代に至っても実施されていた．その際には同族の団結が重要な役割を果たした[11]．

現在の同族の分布と本家・分家関係をみると（第3図），向島はH家とKa家とKi家が，和倉を含めた東島はK家とHa家とSa家が，新田島はK家が，西島はT家とS家とF家が主な構成員となっており，それぞれの「島」が地縁的結びつきとともに同族的結びつきの単位となっていたことがわか



第3図　入善町木根地区の島と同族集団
資料：聞き取りにより作成

る．本家分家関係の空間的広がりが，西島の場合には，1例を除いてすべて「島」の範囲で完結しているのに対して，その他の向島，東島，新田島の場合には相互に入りくんでおり，個々の「島」を単位とする生活空間が連合して，さらに大きな三島という単位が形成されていったことが推定できる．姓を同じくする家は，Ka家の場合を除いて同じ寺の壇家となっている．入善町吉原地区の光明寺と光誓寺の門徒が多いが，青木地区の浄慶寺や東弧地区の善称寺，そして魚津市の詫坐寺門徒もいる．木根地区の同族内での結びつきは現在では弱く，ごく近い親類を除くと特別なつきあいはみられない．

地縁的集団であるとともに同族集団的性格をもつ「島」は，木根地区の基本的生活単位となることが多い．例えば，自治組織としての区は三島と西島の2つがあるが，三島の場合，和倉を含む東島と向島と新田島の3つの「島」が区長の選出単位であり，2年任期でそれぞれの「島」から輪番で選ば

れる．また，区の下部組織である班は，それぞれの「島」を１～３地区に分けたものである．木根神社（三社之社）の宮総代は西島，東島（和倉を含む），向島，新田島の４つの「島」からそれぞれ１人ずつ選ばれることになっている．

Ⅱ－２　班の機能と行事

１）班の機能

木根地区の班は，それぞれの「島」を道路や用水路などの境界や家の集合状態を考慮して，10戸前後のまとまりごとに分けたものである．西島には３つ，東島，向島，新田島には２つ，和倉には１つの班がある．三島の場合には班長の１人が区長から副区長に指名される．班は区の下部組織として，町からの各種の印刷物の配布や情報伝達の単位である外に，日常生活の上で最も身近なつきあいの範囲でもある．しかし，改った行事の主なものとしては，新年宴会と花見とサナブリ程度である．班は葬儀の際の互助組織である．不幸があった家に木根地区の全戸が香典を持参し，葬儀に参列するのが習慣であるが，具体的な世話は当該の班と近い親類によって行なわれる．

２）班の行事

新年宴会　新年宴会は１月２日にそれぞれの班ごとに，特定の個人の家で行なわれることになっている．数え年が42歳と60歳の厄年にあたる男性のいる家が率先して会場をひきうける習慣になっており，酒の費用を負担する．料理は５～６年前まで会場となった家が作っていたが，現在では主に入善町芦崎地区の魚屋に仕出しをたのみ，必要経費を参加者で平等に分担するようになっている．向島の班のようにそれぞれの家から世帯主１人が参加する場合と，東島の場合のように複数あるいは家族全員が参加する場合など，班によってさまざまであるが，最近の傾向としては多くの者が参加するようになっている．普通は午前11時頃から始まり，午後５時頃に散会する．この際に４月から任期が始まる次期班長を選ぶ．

花見　４月の初旬の桜の季節になると，それぞれの班ごとに構成員の自由参加で花見を行なう．場所は集落の中心部にある木根神社であったり，近隣の適当な場所であったりする．雨天の場合は公民館を利用することもある．参加者が会費を平等に負担する．

サナブリ　サナブリとは田植終了時の祝いであり，５月中旬の土曜日の夕方，それぞれの家の世帯主が食事を兼ねて会場となる家に集まり，宴会を行なう．この地区では1965年に圃場整備が完了したが，翌1966年から1970年頃まで，田植機の普及によって中止されるまで班が単位となり共同田植が実施された．また，1953年頃にこの地区に耕耘機が導入される以前には，長野県から農耕用の馬を借りる慣行があり，馬を借りた仲間，あるいは集落内の馬の所有者を中心に田植仲間がつくられていた．当時でも育苗は個人で行なったが，耕起や代かき，ワク押し，田植は共同で行なった．田植が終了すると田植仲間で酒宴を行ない．翌日に仲間全員で芦崎地区や入善地区の銭湯へ日帰りででかけるのが習慣であった．古い時代の田植仲間の範囲は必ずしも班の範囲と一致しなかったが，ほぼ対応していた．1950年代までさかんに使用された水車の仲間も，班の範囲を越えるものではなかった．農業の機械化以前には，この行事は大きな意味をもっていた．

Ⅱ－3　区（生産組合）の機能と行事

1）区の機能

三島と西島はそれぞれ区と生産組合をつくっており[12]，区長は生産組合長を兼ねている．区と生産組合の行事は未分離なことが多く，その主なものは新年宴会，総会，常会などである．そのほかに農業生産に関係するものとして，農協職員との座談会（農事講話会），青田まわり，水田の転作のわりふりなどがある．農業協同組合の総代の選出は，区を基本単位としている．さらに旧青木村の運動会には，やはり西島と三島という区が単位となり参加する．旧青木村には10の区がある．区長は自治公民館長としてその運営にあたっている．区の行事や集会には主にこの公民館が用いられる．三島の公民館は1936年に建てられたものを1986年に改築したものであり，三島と西島両集落すなわち木根地区の公民館も兼ねている．この場合，地元では木根公会堂と呼ぶ．この報告でもこれにならい木根公会堂とよぶことにする．西島は独自に公民館を維持しているが，大きな行事や多人数が集まる場合，公会堂を使用する．

西島と三島の全戸には有線放送の受信機が備えられている．送信機はそれぞれの区長宅にあり，ほぼ毎日午前6時30分と午後6時～7時に放送することになっている，区や生産組合の仕事の他に，老人会，婦人会，宗教関係などさまざまな情報が区長のところへもたらされ，それらが放送される．有線放送は1957年に旧青木村の全戸数を対象にして設置され，当初は青木農業協同組合から放送されていたが，1965年からそれぞれの区で維持管理することになった．区長以外は送信できず，他は情報を受けるのみである．区長が交代すると，送信機を新区長宅へ移動する．西島と三島の区長は電話を用いて相互に連絡し，情報を交換している．有線放送は黒部川扇状地のような散村積雪地帯では，有効なコミュニケーション手段となっている．

区と生産組合の行事，公民館の維持管理に必要な経費はあわせて，戸数割りと農地の反別当りで徴収される．4月1日から翌年3月末までが会計年度となっており，1985年度の三島の収入の合計は1,458,189円で，その内訳は繰越金261,239円，負担金（1戸当り3500円，反当り150円の割合で徴収）が320,850円，事業収入が419,200円，助成金（町，農協，土地改良区からのもの）が388,728円，その他預金利子などが68,172円であった（第3表）．事業収入は慰安会や新年宴会などの会費であった．支出の合計は，会合費が204,677円，事業費666,896円，有線放送経費が29,000円，助成金80,000円，その他が71,340円である，事業費の中で最も大きな支出は後に述べる慰安会と新年宴会への支出であった．助成金の中には新しい公民館建設準備の費用が含まれていた．その他には三島倉庫の火災保険掛金，選挙のあいさつに用いる酒代，公民館の消耗品が含まれていた．

2）　区の行事

新年宴会　1月4日の午後，西島と三島の農家，非農家を含めた全戸から世帯主が1人ずつ参加して，それぞれの公民館で新年宴会を行なう．午後2時から3時頃に集まり夕刻まで飲食するが，料理は芦崎地区の仕出し屋から取り寄せ，経費は平等に負担する．

総会　3月下旬に三島と西島の公民館でそれぞれ総会が開かれる．すべての家の世帯主が参加することになっている．生産組合の経費も含めた区の収支決算報告とその承認が行なわれ，さらに行事

第3表　三島区収支決算（1985年4月1日～1986年3月25日）

収入 区分	内訳	金額(円)	支出 区分	内訳	金額(円)
繰越金		261,239	会合費		204,677
負担金		320,850		常会	156,747
	1戸当3,500円×67戸	234,500		班長会関係	47,930
	反当別反当150円	86,350	事業費		666,896
事業収入		419,200		慰安会	332,076
	慰安会（金太郎温泉）	219,500		農事講話会	62,650
	新年会	170,700		農協農業祭	5,000
	農事講話会	29,000		秋祭礼	9,200
助成金		388,728		新年会	206,700
	町関係（転作・多用途米）	62,100		海岸松植樹	450
	納税報償金	180,000		体育関係	50,820
	農協関係	135,128		(青木地区体育大会)	(44,520)
	(サシ米代)	(40,845)		(青木地区ソフトボール大会)	(6,300)
	(調査費)	(2,800)	有線放送		29,000
	(配当金)	(5,995)		有線放送修理代	14,000
	(部落座談会)	(7,133)		有線放送コンクリート柱	15,000
	(軽油免税)	(78,355)	助成金	三島体協	80,000
	土地改良区江切助成金	11,500		公民館建設委員会	50,000
利用料	食卓利用料	7,300	その他		71,340
その他		60,872		前正副区長感謝状記念品	28,650
	利息	6,082		前副区長事務手当	10,000
	社会福祉（日赤）	24,790		三島倉庫共済掛金	9,000
	寄付	30,000		町議選挙酒	15,680
				献穀田酒	7,840
				便所紙	170
収入合計		1,458,189	支出合計		1,051,913
			差引金合計	次年度繰越金	406,276

資料・三島区保存収支決算書綴

計画と予算案が検討される．この際に区と生産組合関係の役員の改選も行なわれる．

常会　月に1回，それぞれの家の世帯主が三島と西島の公民館で会合し，その時々の報告と問題について話し合う．現在では通勤者が多いため，土曜日の夜に行なわれることが普通になった．通常は夏季は午後7時頃まで農作業があるので，午後7時30分頃から始まり，会合の後の簡単な懇親会を含めて午後11時頃まで続く．冬季は午後7時頃に始まり，午後10時頃までには終る．選挙を初めさまざまな機会に集落に寄与された酒を，この際に飲む．

慰安会　田植の終了した5月の第2日曜日頃に日帰りで近隣の温泉へ出かける．年によっても異なるが魚津市の金太郎温泉，朝日町の小川温泉，宇奈月町の宇奈月温泉などが主な目的地である．原則としてそれぞれの家から1人が参加する．会費を徴収する以外に納税報償金がこれに使用される．

全戸数の70～80％がこれに参加する．

3）農業生産に関する行事

農事講話会と青田まわり　生産組合本来の行事としては，1月27日と5月19日に農業協同組合の営農指導員と集落民の座談会があり，これを農事講話会と呼ぶ．5月から7月にかけて3回にわたって青田まわりが行なわれる．これは農業協同組合と農業改良普及所の指導員とともに，水田を回り現地で指導をうけるものである．最近は通勤兼業者の世帯主が多く，不在であるため，主婦が参加することがめずらしくなくなった．

江浚い　3月下旬の区の総会が開かれる日の午前中には，江浚いが行なわれる．三島と西島でそれぞれ別に分担箇所を決めて，主要幹線用水路を清掃する．非農家も含めて全戸が参加することになっている．町からわずかの補助金がでるが，茶菓代程度である．1960年代に用水路が整備される以前には，稲作に不可欠な重要な行事であったが，現在では簡単な作業になり，午前7時30分から始まり午前10時頃には終了する．

転作のわりふり　水田利用再編対策の実施に伴う転作のわりふりは，町から旧青木村の区長会に転作面積が知らされ，さらに各区長がそれぞれの区において個人別にわりふる．ただし，集団転作を行なうと多くの補助金がもらえるため，区全体で転作田を場所的にまとめる作業が必要である．これは区長兼生産組合長の仕事である．

Ⅱ－4　木根地区の諸組織と行事

1）木根地区の諸組織

行政や農業協同組合の末端組織として三島と西島に分かれているというものの，木根地区はかつての藩政村であり，明治期以降も1つの集落として住民に認識されてきた．現在のように区と生産組合が別れたのは第2次世界大戦後，農業協同組合の下部組織である生産組合をつくる際である．木根地区の最も重要な精神的な核は，木根神社（三社之社）であった．木根地区の家々の連帯感は，主として木根神社の諸行事を通して維持されているといっても過言ではない．それゆえ木根地区全体に関する諸行事は，神社関係以外のことであっても，宮総代が中心的役割を果たす．すでに述べたように，宮総代は木根地区の4つの島からそれぞれ1人ずつ，比較的年配の古い家柄の有力者が選ばれる．いずれも区長や農業協同組合の総代の経験者であり，さらに旧青木村の範囲や入善町にかかわる諸役員であった者が多い，

宮総代は木根地区を儀礼的な面で代表し，隣接地区の火事や洪水，大波などの災害の見舞，町長・町会議員当選祝いにおもむくほか，農業協同組合理事・監事，町会議員，各種団体役員の選挙候補について隣接地区と調整したりする．宮総代の任期は2年であり，これを2期勤めるのが慣習となっている．区長や班長は実務が多く，極めて多忙であるのに対して，宮総代は名誉職としての性格もあり，希望者も多い．

神社関係の主要な行事としては，年始祭，左義長，年頭祭，春祭，虫祭，秋祭，新嘗祭がある．そのほかの木根地区の行事として，新年宴会や宮の総会，盆おどりなどがある．さらに木根地区にはい

くつかの性別・年齢別組織がある．それらは35歳までの男性による精明会，36歳から55歳までの男性の三四五会，60歳以上の男性・女性の福寿会（老人会），30歳代前半までの若妻会，それ以上の年齢層の婦人会などであり，それぞれ活発に活動している．そして，その活動の主な場所が木根公会堂である．さらに，雅楽の会や家庭菜園をつくる会などがあり，また農業関係では球根栽培者のグループや育苗組合に所属しているグループなどがある．

神社を中心とした経費は，区の経費とは別会計で木根地区の全戸（木根神社の氏子）から徴収される．会計年度は８月１日から翌年７月31日までである．1985年の収支決算書によると，収入は722,862円で，その主要なものは１戸当り6,000円ずつ徴収される割当金であった[13]．支出をみると，氏子総会費や総代手当，神社の維持費・修繕費，神社や墓地の清掃の謝礼，祭の経費の外に，公会堂の火災保険費用，川原運動公園（木根地区のゲートボール場）造成費用，三四五会や精明会，婦人会，福寿会，児童クラブ，雅楽の会への補助金も含まれている．

木根地区では1986年に町から50万円の補助金を得て，総工費2,100万円で公会堂（公民館）を建設したが，これは1936年に建てられ老朽化していた木根公会堂を建てかえたものである．新しい建物は，木根公会堂であるとともに，三島公民館としての機能を兼ねている．そのため建設費の負担額をみると，三島の各戸から24万円，西島の各戸から８万円となっている．なお，西島には別に1971年に建てられた西島公民館がある．公会堂の建設費の徴収にも，区長とともに宮総代があたることになっている．さらに，木根公会堂の消耗品や光熱費を含めた維持管理費は，今後，神社の会計の中に組み込まれるようになる．

２）神社を中心とした行事

年始祭（新年宴会）　年始祭は１月１日に木根地区全体で行なわれる行事で，普通新年宴会と呼ばれ，これにはそれぞれの家から１人に限られず複数が参加する．午前８時30分頃から木根神社で初詣をすました人々が，木根公会堂に集まる．数え年42歳をむかえた男性の初老の「おひろめ」がこの行事の主旨の１つである．午前10時頃から浄土真宗のお教（正信偈）を参加者で唱える．仏教に通じた地区の長老が先導し，僧侶をよぶことはない．黒部川扇状地では普通にみられることであるが，この公会堂（公民館）にも仏壇が設けられている．次いで宮総代，区長，地区選出の町会議員，農業委員会委員，土地改良区の理事，民生委員などが年頭のあいさつを行なう．そして神社や区，公民館などに寄付された酒の披露の後，初老をむかえた人が主賓，還暦をむかえた人が準主賓となり，酒宴が行なわれる．酒宴は午前11時30分頃から午後１時頃まで続くが，これには女性はほとんど参加せず，先に帰宅する．

1985年度の神社の行事明細書によると，年始祭の際，神社に清酒６斗７升が奉納され，これを福寿会（２升），三四五会（３升），精明会（２升），若妻会（２升），婦人会（３升），消防団（２升），雅楽の会（２升），左義長（２升）の各団体と西島（４升），和倉（２升），東島（４升），新四島（４升），向島（４升）に配分し，神社が６升預り，残りの２斗５升を当日の宴会で使用した．

年頭祭　１月20日前後には年頭祭が行なわれる．これは本来元旦に行なわれるべき性格のものであるが，木根神社の神事をつとめる黒部市三島地区の八心大市比古神社の神主は，ほかに20数社に関

係しているため，この時期にようやく順番が回ってくる．宮総代が社殿を清掃して，幕をはり，旗をあげ，米，魚，野菜，酒などの供物をととのえる．午後３時頃から30分ほどでお祓いと祝詞を終り，その後１時間30分ほど公会堂に席を移し直会を行なう．これには地区の役員を含めて年配者が30人ほど参加する．

左義長　１月15日に子供とその親が中心になって行う行事で，神社の境内に正月の飾や書初などを持寄って焼く．

春祭　３月14, 15日に行なわれる春祭りは，４人の宮総代が中心となって準備し，神主のお祓いと祝詞の後，公会堂で直会が行なわれる．参拝者は年配者を中心に30～35名で，各自100円の賽銭と清酒の２合ビンを持参する．春祭にはお供米代として各家から500円ずつが徴収される．

虫祭　６月22日は虫祭であり，虫送りのお祓いがある．それぞれの家に御幣のついた榊（最近では緑のプラスチックの棒を用いるようになった）が配られ，各自の農地の適当な場所にそれを立てる．木根地区の東西南北の４隅にも榊が立てられる．

秋祭　秋祭はこの地区で最も大きな祭で，10月14日と15日に行なわれる．70～80人が神社に参拝する．宮総代が神社に供物をそなえ，幟を立てる．10月15日の午後１時30分頃から幼稚園児と小学生が御輿をかつぎ，東島，向島，新田島，和倉，西島の順で巡る．10月15日の午前８時30分頃から午後０時30分頃までに，２人の神主が地区内のすべての家を個々に訪れ，お祓をする．宮総代が先導して１人の神主は和倉から西島，新田島の順に，もう１人の神主は東島から向島，そして新田島の順に巡る．神主への謝礼として，祝詞のお礼を賽銭，玉ぐし代，それに酒と新米とモチ米をそれぞれ２升ずつ，さらにフクラギ２匹，大根とニンジン，コンブなどの供物を贈る[14]．午後３時頃から神社でお祓があり，その後公会堂で男性が中心になって酒宴を行なう．子供の御輿の巡回が終ると，やはり公会堂で父兄がつきそって，慰労会を行なう．この地区の伝統芸術である雅楽もこの祭で演奏される．

新嘗祭　11月24日には新嘗祭を行なう．宮総代は午前９時頃から神社の清掃をし，供物をあげ，国旗をあげる．午後３時頃から神主によるお祓があり，その後酒宴になる，これには24～５人が参加するにすぎない．木根地区分の全戸から500円ずつのお米代を徴収し，神主へのお礼とする．

宮の総会　木根地区全体の総会で，神社関係を中心とした会計の決算と予算の報告が行なわれ，承認を得る．普通８月の第１日曜日に神社と公会堂を清掃してから行なわれる．すでに述べたように神社以外の経費でも，木根地区全体に関するものはここで取り扱われる．

盆おどり　８月13日に木根地区全体で行う行事である．主に精明会が世話をし，各家から2000円ずつ徴収して，木根神社で行なわれる．

３）諸組織の活動

精明会　すでに述べたように木根地区には各種の任意団体があり，それぞれが独自の活動を行なっている．35歳未満の男性から成る精明会には青年団も含まれ，約30名の会員がいる．古くから木根地区の諸活動の中心になったものであった．例えば1936年に建てられた古い木根公会堂は，精明会が中心になったものであった．現在ではスポーツやレクレーション，懇親会によって会員相互の親睦をはかるほか，木根地区の物故者の法要を行なったり，夏の盆おどりを主催したりしている．この地区

に古くから伝わる芸能を保存する雅楽の会も，精明会の会員が中心となっており，12～３人が参加している．太鼓（１名），笙（５名），笛（２名）から成り，神社の祭礼の際には欠かすことのできないものとなっている．

三四五会（みよい）　36歳から55歳までの男性がつくる三四五会の会員は，約60名を数える．１月の新年会，４月の花見，７月の登山，８月のソフトボール大会，10月の講演会など多様な催しを行なっている．これらの催しは会員に限らず，家族が参加することが多い．新年宴会や講演会など公民館を使用することが多く，講演会には大学教授，僧侶，県の社会教育主事などが講師として招かれている．この会は６年ほど前につくられたにすぎないが，現在この地区の中核となる人が多く，活発に活動している．

福寿会（老人会）　60歳以上の男女がつくっている福寿会は，約60名の会員がいる．1986年春に三島の区長がよびかけ，ゲートボール場を新たにつくり，川原運動公園とよぶようにした．８ａの土地を無償で借り，木根地区全体の予算の中から整地代と建物修理代，材料費を合せて40万円を支出した．このゲートボール場と公民館が福寿会の日常の活動の中心的場所となる．福寿会は年２回虫祭りと秋祭りの前に神社の境内の除草・清掃も行なっている．この他に，三四五会と福寿会の会員の中間の年齢層が大正会をつくっているが人数が10名程度で懇親会をたまに行う程度でほとんど活動していない．

若妻会・婦人会　女性の組織としては35歳より若い年齢層の若妻会とそれ以上の年齢層の婦人会がある．懇親会や慰安旅行，料理・生花教室，その他ボランティア活動などを行なっている．

その他の組織　レクリエーション組織としては，大正琴のグループと家庭菜園をつくる「すごろくグループ」などが活動しており，いずれも女性が構成員である．また，児童クラブは小・中学生の学校外の地域活動を促進するもので，子供の父兄が中心になり世話をし，秋祭の際の子供御輿を主体的に行なったり，海水浴やハイキングを企画したりしている．これに類するものとして，保育園児の母の会というものもある．

木根地区の人々は当然のことながら多くの経済的組織やグループに属している．しかし，これらの組織は木根地区内で完結するものは少なく，木根地区の人々が構成員として加わっている場合が多い．例えば球根を栽培している５戸の農家は，青木球根組合に属し，相互に経営や技術の交流を行なっている．稲作の育苗組合も旧青木村を対象とした組織である．圃場整備完了後導入されたトラクターを中心に木根地区トラクター利用組合があった．しかし，農家がそれぞれ機械を購入するようになって，これは1984年に廃止された．消防団は隣接の目川地区ともに青木分団第３班を構成しており，青木土地改良区の役員の選出単位は青木用水下流の木根地区を含む４つの大字が１つにまとまってつくっている．

近年のように農外就業が増えてくると，職場のグループでの交流が多くなると考えられるが，聞き取りによると，実際にはそれほどこれらの活動は活発ではない．木根地区からは吉田工業（20人），新和工業（８人），日本電気（８人）への通勤者が特に多いが，これらの人々がそれぞれまとまって特別な活動をすることは希である．

Ⅱ－5　農村のコミュニケーションの特色

入善町木根地区におけるさまざまな組織と行事について述べたが，伝統的なものが依然として多く残っており，それらに新しいグループによる文化活動が加わり，多くの時間が割かれていることがわかった．これらを通じて，密度の高いコミュニケーションが農村ではみられるといえよう．しかしながら，一般的にいって，このような行事によって制約されることから，すべての住民にとって集落は住みやすい生活空間であるかについては疑問がある．むしろ生活が豊かになり，個人主義的傾向が強くなるに従い，わずらわしい面も多くでてくるのではないかと思われる．神社の行事などへの参加者が少くなる傾向は，兼業による生活の多忙化とともに，このような意識の反映ではないかと考えられる．特に男性の若年・壮年層の集落内での活動が相対的に不活発である．反面，経済的・時間的に余裕のある高齢者層や婦人層が集落内で大きな意味をもつようになってきた．

いずれにしろ，木根地区の事例を通して，黒部川扇状地の農村の人々は，依然として多くの行事に基づく強い集落への帰属意識をもっていることがわかった．ところで，木根地区では集落の自治的・社会的構造を反映して，班，島，区，大字地区という4つのスケールのコミュニケーションがみられたが，ここで完結するばかりではなく，旧村や町のレベルまで広がるものも多い．旧村の範囲として，小学校区や土地改良区，地区公民館，農業協同組合支所の管轄範囲に基づくコミュニケーションが考えられる．また，町の範囲におよぶものとしては，町役場や農業協同組合，球根組合，共済組合，農業改良普及所，商工会，中央公民館，中学校区など多数の行政や教育，経済組織のほかに多くの自主主的なサークルを通じてのコミュニケーションがある．木根地区では伝統的行事やコミュニケーションの場として，特に重要な役割を果たしたのが，公民館（公会堂）であった．そこで，次に公民館の活動を通じて，黒部川扇状地におけるコミュニケーションの空間的広がりについて検討してみよう．

Ⅲ　農村のコミュニケーションと公民館

Ⅲ－1　自治公民館

1）　木根公会堂（公民館）の機能

1949年に施行され1985年7月に改正された社会教育法によると，公民館は「市町村その他一定地区内の住民のために，実際生活に即する教育，学術及び文化に関する各種の事業を行い，もって住民の教養の向上，健康の増進，情操の純化を図り，生活文化の振興，社会福祉の増進に寄与することを目的とする．」としている．そして，公民館は法人によって設置される330 m^{2}以上の面積をもつ建物で，しかるべき事業を行い，そのための施設を備えている．公民館は営利を目的としたり，特定の政党の利害に関する事業を行うことができず，特定の宗教を支持するものであってもならない[15]．この意味からすれば，木根地区の木根公会堂，三島公民館，西島公民館はいずれも正式な公民館に該当せず，いわゆる類似公民館あるいは自治公民館とよぶべきものである．

木根地区には1986年に建てられた床面積207m^2，木造1階建ての木根公会堂（三島公民館と兼用）と1971年に建設された床面積76m^2，木造1階建ての三島公民館がある．前者の建設以前には木根公会堂があり，それは1936年に当時の精明会の会員が中心になって入善銀行の所有地を借り[16]，570円余

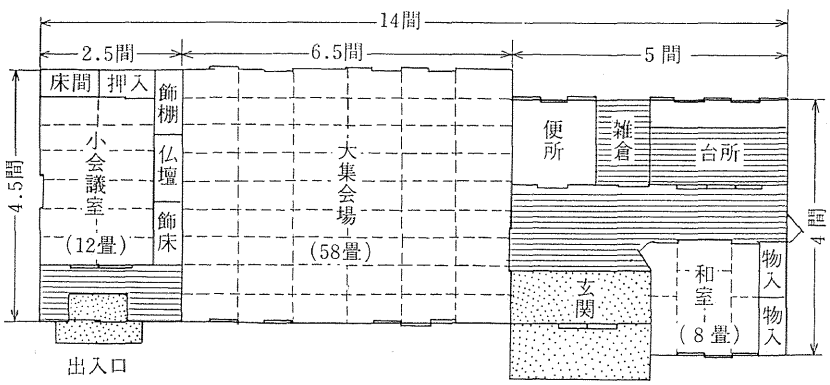
りの予算で建てたものであった．建設費は当時の青木村からの200円の補助金と精明会会員が出稼などをして蓄積した資金でまかなった．出征兵士が増え始め壮行会を開く場所が必要になったこと，若い世代の集会場をもちたいという強い希望があったことが，公会堂建設の直接的動機となった．第2次世界大戦前には西島と三島を区別することはなく，木根地区は1つのまとまりのある集落であったため，この公会堂も木根地区全体で建設され，使用され，維持管理された．西島公民館は，第2次世界大戦後，元の肥料倉庫を集会場として使用していたものを，1971年に改築したものである．

現在の木根公会堂は第4図に示したように，58畳の大集会場と12畳の小会議室，8畳の談話室からなり，いずれも和室である．大集会場の正面には仏壇が設けられており，その左の飾り棚には最近の物故者の名札がかかげられている．また，調理実習施設のついた台所も設けられている．座ぶとん，机，食器，額，置物，時計，ストーブなどの備品はすべて住民の寄付によるものであった．すでに述べた年始祭や精明会主催の法要，法恩講の外に，法事や講などに公会堂は使用される．

1986年10月12日から11月25日までの40日余りの使用状況をみると（第4表），秋祭慰労会，福寿会臨時総会，三四五会と婦人会の合同講演会，町民体育大会選手慰労会，公会堂建設委員会，精明会主催物故者追悼法要，すごろく会のすし作り，三島区常会，大正琴の会の練習，若妻会定例会，水田利用再編対策実施計画確認など，さまざまな目的に使用されている．日誌に記入もれの可能性もあり，これを考えると，竣功してからほぼ連日のように使用されていることがわかる．

2）　黒部川扇状地における自治公民館の分布

木根地区でみたような自治公民館は，主として住民が資金を出し合って建設したもので，そこでは社会教育活動よりもコミュニテイ活動が多く行われている[17]．黒部川扇状地では，このような自治公民館の建設が第2次世界大戦前から活発に進められてきた．入善町の例によると，1945年にはすでに20の自治公民館があり，これらは昭和10年代に集落の集会場，共同作業場，公会堂，青年会館として建てられたものを転用したり，改築したりしたものが多かった．さらに1955年までに33館が新設され，全部で55館になった．そのうちの24館は，1951年から1955年までの5年間につくられたものであった．さらに1968年までに75館となり，1986年には97館となった．



第4図　入善町木根公会堂・三島公民館間取り
資料：木根氏子保存間取り図

第4表　木根公会堂・三島公民館利用状況（1986年10月12日～11月25日）

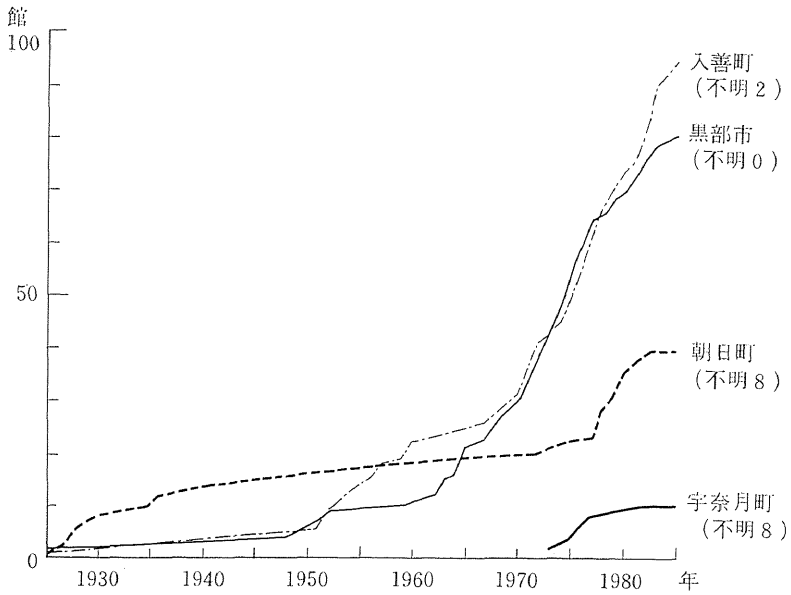
月　日	時　　間	利　用　者	利用目的（利用人数）
10月12日	7時～21時	木根地区	公民館竣功式（？）
13日	8時～14時	木根地区	公民館竣功式後始末（？）
15日	？	子供御輿衆・氏子一同	秋祭（？）
20日	？	福寿会	臨時総会（？）
24日	19時～20時	三四五会・婦人会	講演会（81）
26日	？	三四五会	ソフトボール反省会（？）
26日	16時～21時	三島区	町民体育大会選手慰労会（？）
27日	19時30分～22時30分	木根公会堂建設委員会	建設費内訳内容細目検討会（10）
28日	20時～21時50分	精明会	法要の準備および連絡（8）
30日	13時～？	精明会	物故者追悼法要（150）
11月1日	18時30分～21時	すごろく会	農業祭のための寿司づくり（15）
2日	18時～20時30分	すごろく会	農業祭のための寿司づくり（15）
2日	？	三島区	三島常会（？）
3日	15時～18時	三島グリー会	直会（10）
5日	19時30分～22時	大正琴会	琴の練習（10）
8日	？	婦人会	定例会（？）
9日	15時～	木根公会堂建設委員会	会計支払い事務（？）
9日	19時～21時	すごろく会	農業祭の反省・寿楽苑慰問準備（15）
12日	20時～21時	若妻会	定例会（10）
13日	13時～14時30分	木根地区	報恩講（40）
17日	19時30分～22時	大正琴会	琴の練習（12）
25日	18時～19時30分	三島区	昭和62年度水田利用再編実施計画確認（？）

資料：木根公会堂・三島公民館会合利用日誌

現在の自治公民館の多くは，1970年から1980年の間に新築および増改築されたものである．すなわち，入善町の97の自治公民館のうち，1960年代までにつくられた建物を使用しているものはわずか30館にすぎない（第5図）．黒部市においても同様の傾向がみられ，現在の80の自治公民館のうち59館が1970年以降改築したものである．朝日町と宇奈月町でも1970年代後半にいくつかの自治公民館が建てられたが，1960年代以前の建物が依然として多く残っており，全体として老朽化の傾向が著しい．

黒部川扇状地を構成する4つの市町の自治公民館数をみると（第5表），すでに述べた黒部市の80館と入善町の97館のほかに，朝日町に47館，宇奈月町に18館がある．町内数と自治公民館数の割合をみると，黒部市，入善町，朝日町の順に普及率が高いことになるが，1館当りの人口は黒部市，入善町，朝日町，宇奈月町の順に多く，逆の順で人口当りの自治公民館の密度が高いことになる．黒部川扇状地の自治公民館の分布と町内会の境界をみると（第6図），黒部川扇状地においては大部分の町内会あるいは1つの大字地区内の複数の町内会で，自治公民館を維持していることがわかる．しかし，三日市や入善，泊などの市街地では自治公民館の分布密度が低い．都市部で密度が低く，農村部で密度が高いといえよう．農村部の中でも扇状地北東部の朝日町の旧大家庄村，旧五箇庄村，旧南保村の範囲では，自治公民館の数は少い．

自治公民館としては比較的規模が大きい部類に入る床面積200m²以上のものは，石田・生地・芦崎



第５図　黒部川扇状地の自治公民館の建設年次
資料：各市町教育委員会調べ（1986年５月）

第５表　黒部川扇状地４市町の公民館数と人口

	中央公民館	地区館	類似館	旧町村数	町内数	人口	類似公民館１館当り人口
黒部市	1	11	80	10	93	36,878	462
入善町	1	11	97	10	127	30,015	309
朝日町	1	11	47	8	85	18,601	396
宇奈月町	1	6	18	5	36	7,254	201

資料：各市町教育委員会調べ
公民館数は1986年５月30日現在
人口は1985年12月現在

・横山の各地区など海岸沿いの集村地域と，三日市や入善の市街地などの入口急増地域，そして右岸地域の扇頂部の小摺戸，新屋の各地区，さらに山麓線ぞいの山崎地区に多い．いずれも人口規模の大きい町内（集落）である．このことは，１館当りの世帯数の地域差からも理解できることで（第７図），石田，生地，大布施，芦崎，横山，小摺戸の各地区では，いずれも150世帯以上で１館を維持している．しかし，入善市街地南部や山崎地区では40～100戸程度で比較的大規模な公民館をもっている．一般に扇端部と市街地では１館当りの世帯数が多い，それに対して，扇央部から扇頂部にかけての散村地域では，少い世帯数で自治公民館を維持している．

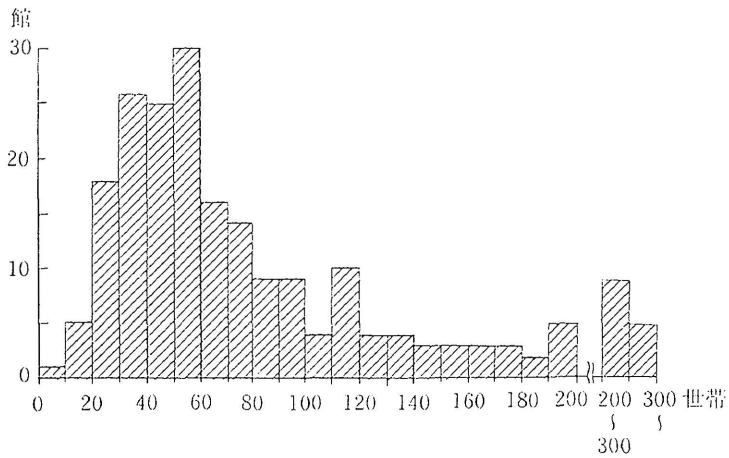
黒部川扇状地内の209の自治公民館について１館当りの世帯数をみると，30～50世帯が最も多く，このような場合が全体の40％近くを占めることがわかる（第８図）．この数は１つの公民館を支えるための財源が確保できる単位であるとともに，相互に顔なじみで密接なコミュニケーションを維持できる単位として適当なものと考えられる．さらに１館当りの世帯数を20～100の範囲に広げると147館

第6図 黒部川扇状地における自治公民館と地区公民館，中央公民館の分布（1986年10月）
資料：各市町教育委員会調べ，および聞き取り

が含まれ，これは全体の70％を占める．1館当りの世帯数がこれ以下になると財政的に苦しくなり，またこれ以上になると自治公民館の目的であるコミュニケーションをはかることが困難になると考えられる．黒部川扇状地の農業集落の構成戸数をみると，30～50戸のものが最も多く，すでにみた木根地区や別の機会に発表した浦山新地区のように[18]，100戸前後の地区になると，同一地区内に実質的な集落が複数できあがってくる．

黒部川扇状地においては，圃場整備事業がほぼ完了した1970年から1980年にかけて，急激に自治公民館の充実がはかられた．これらの大部分は自生的なもので，農村住民の日常生活に密着したものである．近年ではさらに市街地での自治公民館が増加してきている．矢ケ崎は1968年の入善町の公民館調査で[19]，自治公民館を支える支持層として，(1)宗教行事を中心とした老人層，(2)生活改善に関わる婦人層，(3)研修・娯楽・体育を目的とした青年層，(4)季節託児所・遊場とする幼児や児童の4つをあげている，近年の社会・教育施設の充実，経済活動の広域化によって，幼児・児童層と青壮年層のための自治公民館の機能は低下したが，老人層と婦人層の活動の場としての機能が強くなっている．

第7図　黒部川扇状地における自治公民館1館当りの世帯数の分布（1986年10月）
資料：各市町教育委員会および住民課調べ



第8図　黒部川扇状地における自治公民館1館当りの世帯数（1986年10月）
資料：各市町教育委員会および住民課調べ

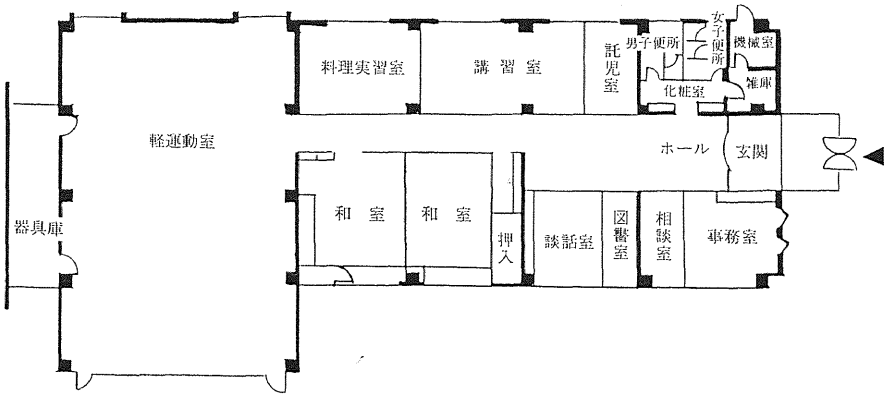
Ⅲ－2　地区公民館

黒部川扇状地においては，集落レベルの自治公民館のほかに，さらに旧町村の範囲の地区と町全域という2つのスケールにわたって公民館が配置され，家庭につながる「生活センター」としての自治

公民館，その基盤に立った「地区センター」としての地区公民館，そして「文化センター」としての中央公民館の建設が1950年代から進められてきた[20]．黒部川扇状地においては，自治公民館が先行し，地区公民館があとに発足した点に特色がある．現在の地区公民館は，1949年の社会教育法の設置により，当時の町村ごとに1館ずつ発足したものであった．入善町では10の旧町村に対して，11の地区公民館が設置されている．これらの地区公民館は，1975年頃まで旧役場や旧小学校を用いたり，農業協同組合や役場支所などに併設されていたものが多かったが，その後各種の補助事業によって，大部分が近代的建物になっている．例えば飯野公民館は1975年に建設省の農村総合整備モデル事業の一環として建てられたものであり，上原公民館は通商産業省の工業再配置促進費補事業によって1986年に完成した入善町産業展示館の一部であり，横山公民館は農林水産省の漁村緊急整備事業によって1980年に完成した入善町漁村センターの一部という具合である．地元が独自に公民館として建設したのは，小摺戸と椚山の2館にすぎない．

木根地区が属する旧青木村では，1949年の社会教育法により，当時の青木役場に公民館が併設された．さらに1953年の町村合併により，役場跡地に青木農業協同組合が建てられ，その2階を公民館として使用するようになった．その後農業協同組合も合併し，入善町農業協同組合青木支所となったが，支所の建物が新築された1975年以降も，2階は公民館として使用された．そして1986年4月に労働省と県の補助による勤労婦人青少年福祉施設整備事業の「入善町働く婦人の家」として新設された．この施設は旧青木村のほぼ中央に位置し，敷地は旧青木小学校跡地であり，隣接して幼稚園，向いに農業協同組合がある．20畳の和室2室，講習室，料理実習室，談話室，図書室，託児室，そして150人を収容できる225.12m^{2}の軽運動室がある（第9図）．総事業費は11,780万円で，そのうちの34%に当たる4,000万円が国と県の補助金であった．

この施設の本来の目的は，勤労婦人や家庭婦人が余暇を利用して職業生活や家庭生活に必要な知識や技術を身につけ，レクリエーションを行う場を提供する施設であるが，実質的には旧青木村の公民館として使用されている．公民館長，主事1人，主事補3人，青年学級主事1人が決められている



第9図　入善町広域働く婦人の家・青木公民館の間取り
資料：入善町社会教育課資料

が，常勤者はいない．青木土地改良区の事務所がこの施設の事務室に置かれており，土地改良区の事務職員に施設の管理がまかされている．また，地区体育協会，婦人会，青年団，区長会，ＰＴＡ，農協婦人部の代表のほか，民生委員や学識者ら10人が公民館運営審議委員となっている．地区公民館開設学級講座は，青年学級と婦人学級，公民講座，そして豊かなふるさと大学などである．これらの事業には町から公民館事業委託料として補助金が出されるほか，公民館運営のための補助金もあるが，いずれも多くない．1985年の青木公民館の補助金は，483,000円であった．

1986年４月28日から７月31日までの「入善町広域働く婦人の家利用承認申請書」により利用状況をみると，軽運動場では10～20人ほどのグループでゲートボール練習，健康体操，卓球，カラオケ練習会，大正琴の会，婦人の体力づくり運動，バトミントン，ビーチバレーなどがほぼ定期的に行なわれているほか，婦人学級や住民検診などにも使用されている．軽運動場は84日間の開館日に45回使用された．他方，和室は同じ期間に50回使用されており，大正琴の練習，婦人学級，住民検診，胃ガン検診，詩吟の練習，カラオケ教室，農協婦人部会会合，婦人会会合，若妻会，民生委員会，遺族会，青木体育協会，商工会，青木区長会など，さまざまな用途に用いられた．これらも10～30人の参加者のものが多く，旧青木村の範囲を対象としたさまざまな組織の会合やレクリエーショングループが多い．中には，公民館に隣接した集落の会合で使用する場合もある．料理実習室，講習室，談話室の使用回数は，同じ期間にそれぞれ３回，３回，１回と非常に少なかった．一般的には婦人と高齢者の使用が多く，さらに一部の老人が日中に使用する外は，大部分午後７時30分から10時の間に使用が集中している．

Ⅲ－３　中央公民館

黒部川扇状地の４市町にはそれぞれ１館ずつ中央公民館が設置されており，市町全域を対象としてさまざまな事業を実施している．かつての木造の建物が，朝日町では1972年，黒部市では1978年，宇奈月町では1980年，入善町では1986年に鉄筋コンクリートの近代的建物に改築された．入善町では中央公民館と文化ホール，町立図書館との複合施設として「入善町民会館」が建てられた．町民会館の延床面積は5,958m^{2}で，そのうちの2,004m^{2}を中央公民館が占めている．中央公民館には会議室１，研修集会室３，和室３，視聴覚室１がある．床面積が2,600m^{2}で座席数が560の文化ホールは，優れた音響効果をもち，クラシックコンサートにも適する施設を備えている．床面積1,353m^{2}の図書館は蔵書数が48,000冊余りであり，そのうち児童図書が27％を占め，1985年度の実績によると利用冊数のうち52％が児童書であった．

中央公民館の利用団体としては，児童クラブ連合会，入善町体育協会，入善町ＰＴＡ連絡協議会，入善町連合青年団，入善町連合婦人会などの地域組織のほかに，大正琴，囲碁，はり絵，詩吟，書道，墨絵，ビデオ，短歌，いけ花，俳句，木彫，写真，尺八，陶芸，フォークダンス，バドミントン，ゲートボール，卓球，体操などの趣味やスポーツの団体を含めると61の組織が利用している．趣味およびスポーツ団体の会員は10～30名ほどのものが多く，入善町全域からの会員を募っているものがほとんどであるが，入善町市街地の人々が多い傾向にある．展示場を利用した美術展示の催しも数多

い．

文化ホールは，文化講演会，映画上映会，音楽会，劇，落語，コンサートなどの催物の外に，バレエやピアノ，詩吟などの発表会，入善町の社会福祉大会や社会教育大会，交通安全町民大会，東洋紡労組入善支部大会，入善町健康づくり町民のつどい，黒部川扇状地シンポジウムなどの集会にも利用されている．町民会館は中央公民館と図書館と文化ホールを有機的に組み合せることによって，町域のみならず，黒部川扇状地全域を対象とした地域文化振興の拠点となることをめざしている．町民会館の中には入善町教育委員会社会教育課が置れ，４人の職員が公民館主事を兼任している外，２人の常任の社会教育指導員がいる．

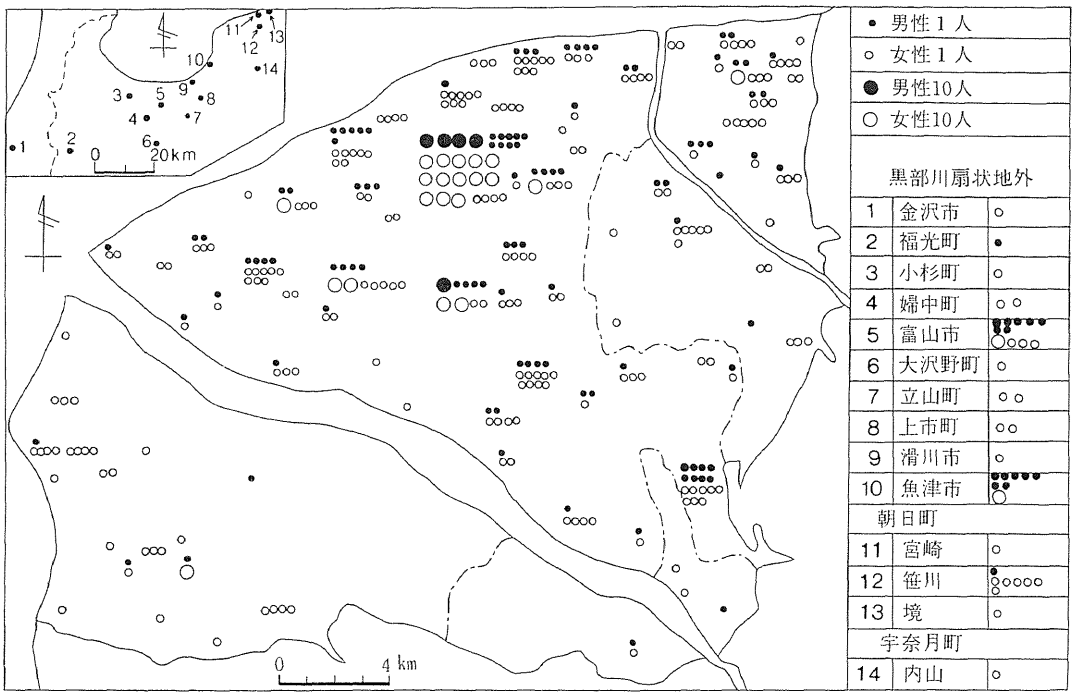
ところで，町民会館がどのような範囲からどれくらいの人々をひきつけているかを，1986年10月から11月にかけて３回にわたって開かれた県民大学への出席者によって検討した．これは富山県教育委員会と入善町民会館の共催によるもので，10月18日は渡辺昇一氏，10月25日は国弘正雄氏，11月１日は林真理子氏による入場料無料の文化講演会であった．氷見市と入善町で同じ催しが行われた．入善町内には町の公報と町民会館催物案内を全戸に配布し講演について周知させ，他市町村には北日本新聞の催物欄，市販の情報誌「タウン情報富山」で宣伝した．受講申込者数は793で，町内564，町外229であった．第１日目の出席者は397名，第２日目376名，第３日目が568名であった．全体の出席率は56％であった．受講者のうち女性が72.5％を占め，しかも20歳代から40歳代までが女性全体の72.3％を占めた（第６表）．これは林真理子氏の講演があったことが大きく影響している．反面，男性は60歳以上が全体の26％を占めた．第10図は受講者の居住地を図示したものである．これによると，町民会館に近い入善市街地の居住者が182人で，全体の28.6％を占め圧倒的に多く，さらに入善市街地近辺の国道８号線ぞい，およびそれより北側から多くの人々をひきつけていることがわかる．さらに入善町に居住する受講者は460人で全体の72.2％を占め，これに朝日町の85人が次いでいる，隣接する黒部市からの受講者は38人で，富山市や魚津市からの受講者がそれぞれ20人と17人であったことと比較すると少い．すでに多くの研究者によって指摘されているが，黒部川が大きな心理的障害となっていることがこのことからもうかがえる．黒部市からの受講者のもう１つの特徴は，その90％近くが女性であり，男性が極端に少ないということであった．

当然のことながら講演の内容や催物の種類によって，町民会館の利用範囲と利用者は異なってくるが，県下に広く宣伝されたにもかかわらず，利用者の居住地は町民会館に近接する入善市街地が極めて多く，次いで入善町内，そして隣接している朝日町は比較的多く，黒部市になると少なくなる，町民会館を核とするコミュニケーションの範囲は，ほぼ町域に限られているとみなしてよさそうである．

第６表　入善町民会館における年齢別県民大学受講者（1986年10月～11月）

	19歳未満	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	不　明	合　計
男	7(4％)	25(14％)	30(17％)	31(18％)	27(15％)	46(26％)	9(6％)	175
女	9(2％)	95(21％)	125(27％)	114(25％)	61(13％)	28(6％)	30(6％)	462
合　計	16(3％)	120(19％)	155(24％)	145(23％)	88(14％)	74(12％)	39(6％)	637

資料：入善町社会教育課資料から集計



第10図　入善町民会館における県民大学受講者の住所（1986年10月～11月）
資料：入善町社会教育課資料
右欄の黒部川扇状地外市町および図示できなかった朝日町と宇奈月町の場所は左上の地図に示した．

以上公民館の例で示したような，集落，旧町村，町といった三段階のスケールの異なるコミュニケーションの空間的広がりは，黒部川扇状地で広くみられるものである．公民館にかかわらず，さまざまな施設，組織，制度も似たような形で配置され，黒部川扇状地におけるコミュニケーションに影響をおよぼしている．

Ⅳ　む　す　び

黒部川扇状地における農村のコミュニケーションの実態を，まず入善町木根地区のさまざまな生活組織とその機能，および年中行事を通して検討した．かっての藩政村であった木根地区では，自治的・社会的地域単位に基づいて，班と区，そして大字地区という３つのスケールのコミュニケーションが存在したほかに，開発の経緯と同族の拡大過程を反映すると考えられる「島」が，区と班の中間のスケールに存在することがわかった，木根地区のような集落のレベルでは，伝統的な社会的・宗教的行事のうえに，行政的・経済的・教育的な組織の下部単位，さらには新しい文化的・レクリエーション的組織の活動が重なって，極めて多くのコミュニケーションの機会が存在することがわかった．そしてこのようなコミュニケーションが行なわれる重要な場所が，自治公民館であった．

一般に黒部川扇状地においては，公民館が地域文化の振興とコミュニケーションの円滑化に大きな役割を果たしている．そして大部分の地域では，すでにみた集落の自治公民館を基盤として旧町村を

対象とした地区公民館，そして市町域全体にサービスする中央公民館が設置され，住民は3つのスケールのそれぞれ異なる機能をもつ施設を利用できる．集落の自生的な自治公民館は，日常生活に密着して活発な機能を果たしている．他方，中央公民館は市町で唯一の高い水準の文化センター，研修センターとしての機能を果たしている．ただその利用者は，市町域全体におよぶというものの，詳細にみれば設置場所の近辺の住民が特に利用するという傾向もみられる．この中間の地区公民館は，近年の各種の補助事業の導入により，建物は立派になったが，その果たすべき機能がいまだに不明確のように思われる．利用状況をみると，旧町村単位で組織されている婦人会やＰＴＡ，青年団などの既成の団体や，建物近辺の趣味やスポーツのグループが多いように思われる．地区公民館の活動の不活発な理由として，専任職員がいないということがあげられるが，さらに旧町村という範囲自体のもつ実質的な機能が，農業協同組合の合併や小・中学校の統廃合，土地改良事業の完了などによって，低下してきたことも1つの理由としてあげられる．農村のモーターリゼーションによって，住民の行動範囲が広がったことも，中間的な地区公民館の機能の低下と関係あるように思える．いずれにしろ，黒部川扇状地ではコミュニケーションをはかるために，施設面や制度面では極めて恵まれているといえよう．

この報告のための現地調査の際，入善町役場教育委員会社会教育課，木根地区の本田保区長や稲場政治宮総代を初めとする多くの方々，入善町青木土地改良区，入善農業協同組合青木支所，黒部川扇状地地域社会研究所などの諸機関にお世話になった．製図は筑波大学地球科学系の小崎四郎技官に依頼した．この報告作成にあたって，昭和61・62年度文部省科学研究費補助金一般研究（C）「わが国におけるコミュニケーション空間に関する地理学的研究」（代表者：高橋伸夫，課題番号61580200）と昭和61・62年度文部省科学研究費補助金一般研究（B）「わが国の農村地域における非農業化現象に関する動態的研究」（代表者：山本正三，課題番号61450090）による研究費の一部を使用した．以上を記して感謝申しあげる．

注・参考文献

1）手塚　章(1982)：茨城県出島村下大津における自立型農業経営の地域的性格．地理学評論，**55**，814～833.

2）山本正三・北林吉弘・田林　明編著(1987)：『日本の農村空間』古今書院，423ページ.

3）富山県黒部市(1983)：『黒部市総合振興計画』黒部市，125ページ.

4）富山県入善町(1983)：『入善町新総合計画』入善町，131ページ.

5）田林　明(1987)：黒部川扇状地におけるコミュニケーション行動．黒部川扇状地，**12**，14～20.

6）正確にいうと木根新という小さな大字がこの地区の北西部にもう1つあるが，大正初期にこの大字にあった3戸が木根地区中央部に移転し，その後は無家となっているので，実質的には木根という1つの大字とみなしてよい.

7）山本正三・北林吉弘・田林　明編著(1976)：北陸地方における農村空間の区分に関する1つの試み．地理学評論，**49**，361～379.

8）村山祐司・根田克彦・高橋伸夫（1982）：出島村戸崎・大前部落における生活組織の地域性．霞ヶ浦地域研究報告，**4**，63～74.

9）橋本征治(1969)：散居村における社会構造の地理学的研究―砺波における事例―．人文地理，**21**，547～574.

10）入善町誌編纂委員会(1967)：『入善町誌』入善町役場，383～444.

11）漆間元三(1955)：黒部川扇状地の散居制村落―共同社会的性格―，富山県の地理学的研究第2集，23～28.

12）区は行政の末端組織であり，生産組合は農業協同組合の末端組織である.

13) 木根氏子保存：昭和60年度収支決算書.
14) 1985年の行事明細書によると，1戸当りの徴収費用は，お供米代500円とお鏡餅代300円，および祓料であった．神主には111,800円をわたした.
15) 文部省内社会教育行政研究会（1986）：『社会教育行政必携』第一法規出版，603～620.
16) もともと木根倉庫株式会社の敷地であったが，倒産によって入善銀行所有地となった．その後農業協同組合を経て木根地区で購入した.
17) 富山県教育委員会(1985)：『都市部と農村部における公民館活動のあり方に関する調査研究』57～58.
18) 田林明(1984)：低成長期における黒部川扇状地農村の動向――入善町浦山新地区の事例――．黒部川扇状地，9，71～89.
19) 矢ヶ崎孝雄(1968)：入善町公民館の活動．金沢大学社会科教育研究，9，84～88.
20) 入善町中央公民館(1954)：『入善町公民館概況報告（自昭和28年4月1日～至昭和29年3月31日）』80ページ.
21) 新谷賢太郎(1968)：入善町公民館の特色―主として施設面から―．金沢大学社会科教育研究，9，39～65.
22) 入善町教育委員会(1986)：『社会教育の概要』29～34.

Communication and Community Halls in Rural Regions of the Kurobe Alluvial Fan

Akira TABAYASHI

This pepar describes and analyzes communication in the rural regions especially from the spatial point of view. A village, called Kinone on the Kurobe alluvial fan, Toyama prefecture was selected as the study area. Kinone has a population of 436 and 93 households of which about 80 percent are farm households. This was a pure rural community about 20 years ago, but now most farmers engage in such non farm jobs as public employees, factory workers and workers in the service industry. Their non farm income is much more than that of their farm income.

Kinone has three types of territorial subunits of different scale. The fundamental subunit called *shima*, literally island, consists of from 15 to 28 households. It is estimated that slightly high mound-like places with relatively deeper soil in the flood plain were first settled and gradually developed into hamlets, *shima*. There are four *shimas* in Kinone, and these are not only territorial organizations but also areas with long bloodlines.

One *shima* area is further divided into two or three subunits called *han* consisting of from 7 to 10 households. This is the smallest neighborhood and an area where the households concerned communicate with one another intensively in daily life. On the other hand, there are spatial units, that is *ku*, that are larger than those of *shima*. The three *shimas* located in the northeastern part make up Mishima-*ku*, and the remaining one in the southwest is relatively isolated and large enough to be an independent *ku*, Nishijima-*ku*. A *ku* is a self-governed unit which is actually a lower branch of a municipality, machi(town) or shi(city). The head of the *ku* transfers information from the municipality to the *ku* and from the *ku* to the municipality. The two *kus*, Mishima and Nishijima form Kinone, a traditional village.

The communication of Kinone's people is carried out through traditional regular functions

and communal work. There are a New Year's banquet, an annual meeting, monthly meetings, spring and autumn festivals at the Kinone shrine, Buddist functions, the ceremonies of coming of age, marriage, funerals and ancestral worship, dredge of irrigation canals, clearing and repairing of farm roads and planning of rice plant regulation, etc. In addition, there are many spontaneous groups organized by age and sex which are active in recreation and in labour service. Several recreation or sports groups have been also organized.

The community hall plays an important role in pursuing the above mentioned communication activities in Kinone. The community hall was rebuilt in 1986 at a cost of ¥21 million, of which the municipality subsidized only ¥500 thousand and the rest was bore in common by the 93 households in Kinone.

Peoples's communication activities have further expanded spatially beyond the village domain. The important spatial units for Kinone are the areas of the old municipality and the present municipality. There are many organizations and facilities for communication between these spatial units, but community halls and communication activities carried out there are very important in terms of cultural, educational and recreational asepcts. For the old municipality of Kinone a new community hall was built in 1986 by the present municipality in place of the old building that was attached to farmers cooperatives. New central community halls for the present municipality were also built recently.

People on the Kurobe alluvial fan enjoy the three level of community hall systems from village through old municipality and to the present municipality. Village community halls play the part of place for daily communication, and the municipal central community hall has the function of offering various events with a high quality of culture. Old municipal community halls play an intermediate role between the above-mentioned two.

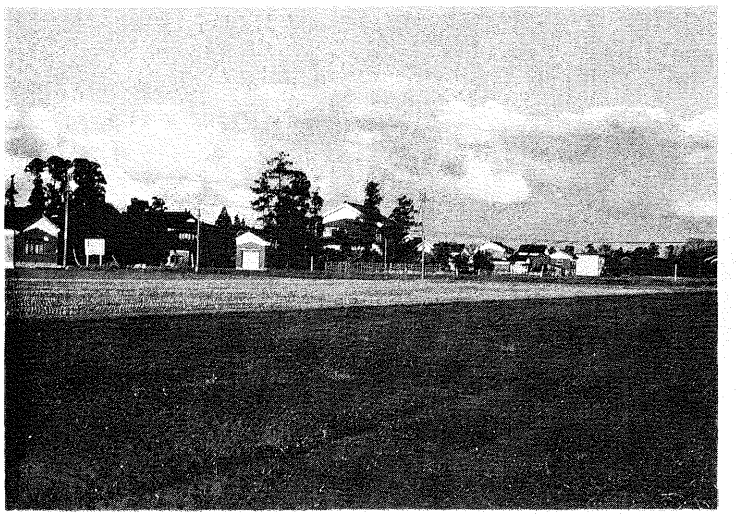


写真1　木根地区の集落景観
（1986年11月）

木根地区の集落は集村をなしており，東島と向島，新田島，和倉，西島のかたまりに分けている．そのうちの東島を西南方向からみた景観である．切り妻，2階建ての家屋が多く，大部分が圃場整備の完了した1970年以降に新築された．左端の建物は木根公会堂（三島公民館）である．手前の圃場ではチューリップが栽培されている．

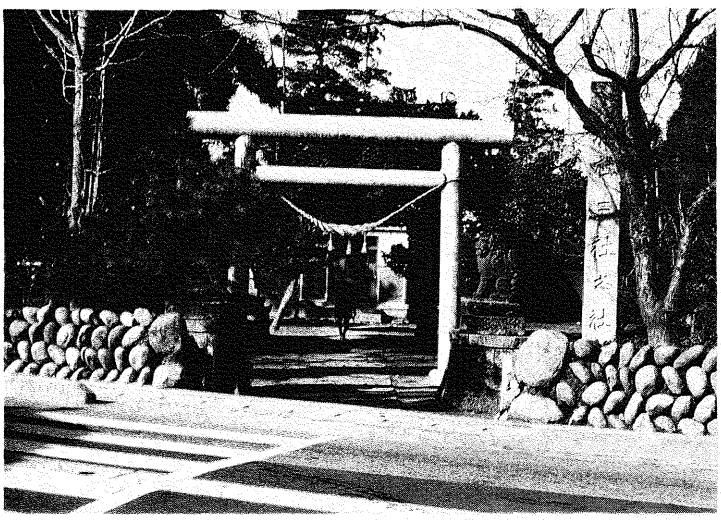


写真2　木根神社（三社之社）
（1986年11月）

木根地区の中央に位置する木根神社は，高皇産霊命，天照皇大神，瓊々杵尊の三社を祀ることから三社之社とよばれる．神社は木根地区の精神的核となっており，この神社の行事が住民の集落への強い帰属意識を維持するために重要な役割をしている．4人の宮総代を中心として管理されている．

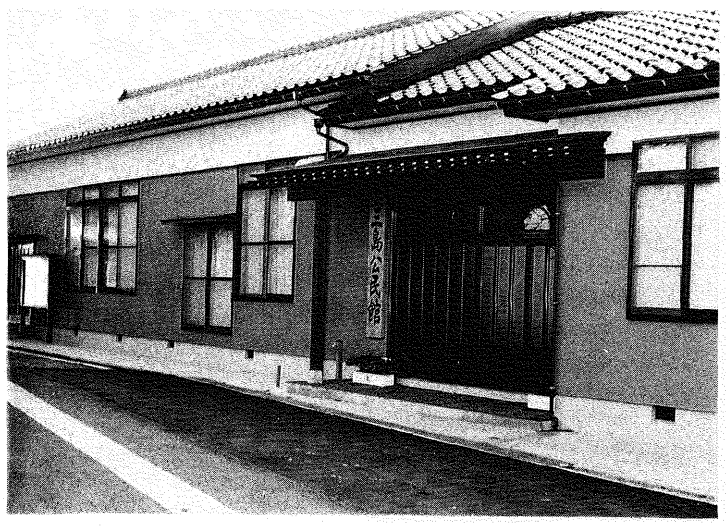


写真3　木根公会堂・三島公民館
（1986年11月）

木根神社の向いに1986年10月に2,100万円の予算で建築された木根公会堂がある．三島公民館と兼用であり，玄関の軒下に横に「木根公会堂」（写真ではみえない），左側に「三島公民館」の看板がかかげられている．日常の生活に密着したさまざまな会合やレクリエーションなどが行われる．

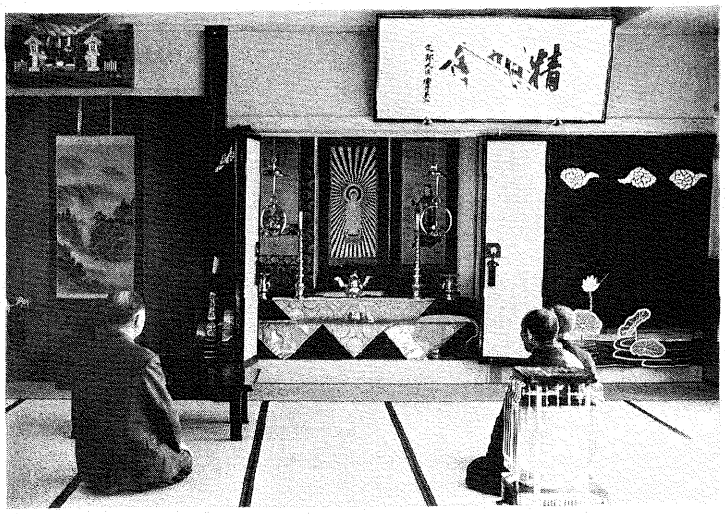


写真4　木根公会堂大集会場（1986年11月）

木根公会堂58畳敷の大集会場の正面には，仏壇が設けられている．浄土真宗がさかんな黒部川扇状地ではめずらしいことではなく，かつては自治公民館が仏教の道場の役割を果たしていた．向って右側のおおいを取ると，物故者の名札がかかっているのがわかる．おまいりしているのは，木根地区の宮総代である．

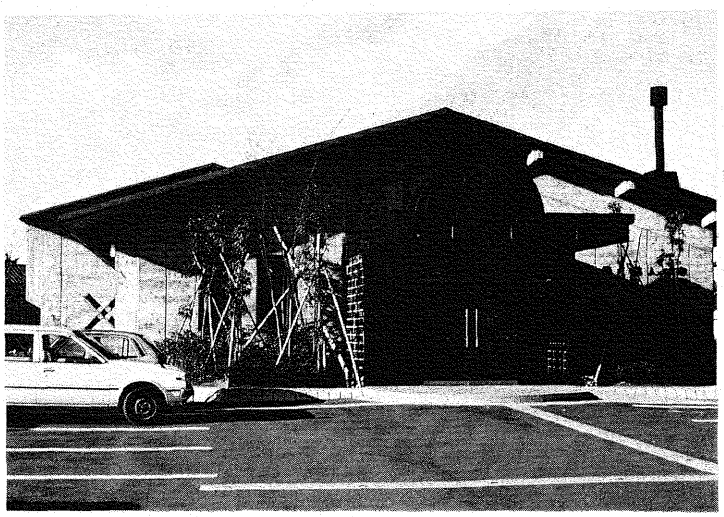


写真5　入善町広域働く婦人の家・青木公民館（1986年11月）

旧青木村のほぼ中央に位置する延床面積603m² の一階建ての建物で，1986年4月に開館となった．労働省と県の補助を得て造られたもので，軽運動場，和室，料理実習室，講習室，談話室，図書室から成り，主に旧青木村の範囲の住民のレクリエーション，スポーツ，さまざまの会合を通してのコミュニケーションの中心施設となっている．

写真6　入善町民会館（1986年11月）

中央公民館と図書館と文化ホール（通称コスモホール）を複合させた延床面積5,957m² の建物であり，入善町役場に隣接して造られた．22億7,100万円の予算で1986年3月に完成し，同年5月に開館された．日常的なコミュニケーション，教育・文化・レクリエーション活動から，高い水準の文化的催物の提供まで多様な機能をもっている．